

昔の記録に「紡績糸、煉瓦石、白木綿、竹簾、綿ネール等で近年ますます盛んになり職工数千人が日夜業務に従事し・・・」とあります。

特に綿織物業については、明治16年で耕作地に対する綿作率が7.9%で綿作が盛んな地域とは言えませんが、幕末の春木村では50%、真上・八田・神須屋でも45%など、平坦部の村では高い傾向にありました。明治になり農家の副業として女性が、「紡績機織」など綿業に携わることが多くありました。明治21年の調査では農家戸数5,032で、従業員数は6,664あり、1戸に1人以上の女子が綿業に携わっていたこととなります。家庭で織り上がった製品を商人が買い取りにくるという方式でしたが、商人の競争が生まれたため、商人が織機を設置し女工を通勤させる形に変化して、近代的紡績工場につながっていきました。



なぜ泉州で紡績業が栄えたの？

大阪周辺は江戸期を通じて綿花の栽培が盛んでした。なかでも河内や泉州地域は日本有数の綿花生産地になりました。

明治以降、日本の工業化が進み、紡織の機械技術も海外から取り入れられます。それにともない、綿花も大量に輸入されるようになり、国内の綿花栽培は衰退していきました。

河内地方は、綿花の輸入に抵抗し機械化が遅れたため衰退していましたが、早くから工場制手工業を導入してきた和泉地方は、いち早く工業化への転換に成功しました。その拠点のひとつが、江戸期を通じて泉南の政治経済の中心であった岸和田でした。明治27年、寺田甚与茂の岸和田紡績株式会社創立に始まり、次々と紡績工場が生まれます。岸和田紡績株式会社は、日本有数の大企業に成長し、岸和田の近代化を推進しました。また、甚与茂の弟利吉も寺田紡績や寺田銀行などを開業し、岸和田の海岸付近や紀州街道沿いには寺田系列の企業や銀行が建ち並び、企業城下町のような様子でした。



NEWS

頑張っています！岸和田木綿物語プロジェクト

地域の歴史・文化や産業を見直し、繊維産業の再生を図るため平成16年に発足。市民に綿の栽培を呼びかけながら、岸和田及び国内で採取された木綿を活用した商品の開発・製品づくりを、地域の繊維関連業者等で構成する「夢つむぎ会」を中心に推進し、毎年「木綿物語フェア」を開催しています。

また、平成23年に岸和田で開催した「第1回全国コットンサミット」は、その後も全国各地で継続して開催、平成29年は、包近の桃の花のつぼみを使って染色した新たな製品開発などに取り組んでいます。



鉄道の開通

南海電鉄

日本で最初の民間資本による鉄道で、阪堺鉄道として明治18年12月、難波から大和川間(7.6 km)を小型SLで初めて開通し、21年5月には難波から堺間が開通しました。その後、堺と和歌山を結ぶ鉄道を紀泉鉄道と紀阪鉄道が計画しましたが、両社が合併して28年に南海鉄道になりました。30年10月、まず堺から泉佐野間が開通しました。南海鉄道は翌年10月、阪堺鉄道の事業を譲り受け、36年3月には難波から和歌山市間が全線開通しました。

貨物は、鉄道が開通する前は荷車や和船による運搬が主流でしたが、徐々に鉄道での輸送に切り替えられています。明治32年、岸和田駅から出荷されたものとして紡績・鮮魚・塩乾魚・雑品が多く、その後、煉瓦製品と繊維製品が大きな割合を占めるようになります。南海鉄道が開業するとともに、旧城下町と紀州街道沿いの町屋群を取り囲むように、紡績関係の工場や工員寮が建ち並び始め、町は活気に満ちていきました。



第1号蒸気機関車

南海岸和田駅
(昭和3年頃)



はんわせん JR阪和線

昭和5年6月、天王寺～和歌山(東和歌山)間に阪和電気鉄道が開通し、南海鉄道との間で激しい競争が展開されました。その後、南海鉄道は、15年に阪和電気鉄道を合併、南海山手線として営業、後に国有化され、現在はJR西日本が運行しています。



NEWS

東岸和田駅上下線高架完成!

平成29年10月22日、JR東岸和田駅の上下線が高架化されました。

新駅舎は、東口、西口どちらからも利用できるようになり、駅舎内のコンコースにはコンビニや飲食店もできました。

踏切が廃止になり、駅周辺道路の交通渋滞がほとんどなくなりました。



阪南港 (岸和田の港)

泉州一帯の大阪湾は水深が浅く良い港には恵まれなかった中で、岸和田港は改修を重ねて多くの荷物の運搬に貢献しました。大正5年の統計では、岸和田港に出入りする船は商船・漁船合わせて、汽船が3隻帆船が8,963隻で海運の中心を帆船が担っていました。

岸和田旧港は、寛政3年(1791)に古城川の河口を整備して造られ、文化14年(1817)、安政3年(1856)に大きく改修し、明治以降も毎年のように改修を重ねています。岸和田紡績が明治26年に港の近くで創業したこともあり、繊維産業を中心に商工業の港としての役割を担いました。昭和に入り大がかりな港湾の改修が計画され昭和13年に完成しますが、戦後の経済状況が大きく変化したため昭和22年に港湾施設の権利を大阪府に譲って任せ、昭和28年から埋め立てに着手し29年に竣工、31年に新港(阪南港)が完成しました。さらに旧岸和田港も埋め立てられ旧港再開発として周辺を再整備し、マンション、商業施設、浪切ホールが建設されています。



浪切ホール

道路交通 の整備

岸和田の旧市街の骨格は江戸初期の城下町建設の時にできました。旧市街を中心に放射線状に道がありましたが、江戸時代以前の京都、大阪から紀州へ向かう主要な道は、内陸部を通る熊野街道(小栗街道)でした。岸和田藩岡部家と御三家の紀州徳川家の参勤交代路として、紀州街道が整備され、海沿いは多くの街道町が形成されました。

大八車や馬車の時代から自動車の時代に移り、道路の幅を広くする必要がありました。国道16号線と呼ばれていた紀州街道は狭い道幅を広げることが困難なため、改修されずに付け替えとなりました。新たに昭和16年に道路が整備され16号線となり、旧紀州街道は市道になります。16号線は昭和33年に26号線と改称され、さらに26号線も交通量の増加に対応できず、昭和41年、新たな幹線道路として第二阪和国道が計画決定され、昭和54年に全線開通。さらに、府道大阪臨海線や関西国際空港へのアクセス道路として臨海部に阪神高速4号湾岸線、山間部を通過して国道170号線(大阪外環状線)や阪和自動車道が整備され、さらに便利になっています。

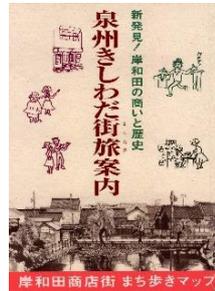
商店街

商業では、欄干橋を中心としたかじやまちや欄干橋商店街に老舗も集まり、泉州一体の買い物の中心的な存在でした。窯業・紡績などの産業の一大集積地となり、大正、昭和初期はたいへん賑わいました。工場が増えるとともに多くの商店が生まれ、娯楽のための演芸場や映画館も数多くありました。

商店街は、戦後になってますます発達し、景気がよく活気があり、昭和39年の統計では、市内に13の商店街と11の小売市場がありました。

現在、郊外型のショッピングセンターができたことにより商店数は減少していますが、11の商店街・商店会があり、それぞれのお店が「なくてはならない地域の専門店」をめざして頑張っています。

読んでみよう!



『岸和田商店街まち歩きマップ～新発見! 岸和田の商いと歴史・泉州きしわだ街旅案内』
岸和田商店街連合会
(平成26年発行)

NEWS

みんな day 参加どんチャカフェスタ

平成14年から南海本線岸和田駅・蛸地蔵

駅を中心とする6商店街と岸和田カンカンベイサイドモール周辺で、春と秋にスタンプラリー、大道芸、人形劇、ステージイベントなどを行っています。



世界恐慌後、帳簿経理が普及し、教育界では、岸和田市立実業補習学校を経て昭和10年商業高校、現在の岸和田市立産業高等学校に発展しました。



岸和田市立産業高校

商工業の歴史②～大正から太平洋戦争終戦まで

大正11年に大阪府下で3番目に市制施行できたのも産業の発展が大きな要因でした。特に工業の発展がめざましく、その中心は紡績業でした。昭和6年の世界恐慌の中で農工水産総額は、大正15年の3割に落ち込み、その後緩やかな回復を見せますが、震災や台風などの災害も続き、綿糸紡績業の盛衰が岸和田市に大きな影響を与えることになります。

昭和16年に始まった太平洋戦争が広がりを見せ、戦争による特需があったものの、岸和田市の経済を引っ張ってきた岸和田紡績は、国策に協力するという形で大日本紡績に吸収合併されることになり、昭和16年7月をもって岸和田紡績の名は消えました。同じように他の紡績会社やロープ産業も大きく再編成され、岸和田ゆかりの企業が次々と姿を消すことになります。繊維産業から機械や器具工業への転換も進められ、戦時下の統制経済の中で岸和田市の工業は大きく変わっていきました。

昭和20年に終戦を迎えましたが、軍需産業は根付かず、もともと地元で育っていた鉄管継手や電気器具、機械修理、紡績機械、ワイヤーロープなどは民需に変えて再生しました。

岸和田の特徴的な産業

～こんなものも盛んに造っていました！

マニラロープ（関西製鋼会社）

海運業や鉄道・鉱山の発展に伴い、必需品であるロープ等の大部分を輸入に頼っていたため、明治45年寺田元之助らが発起人となり関西製鋼会社を設立しました。現在の（株）テザックワイヤーロープです。

鉛筆

明治27年、中村幸次郎が創業しました。小学校児童用が中心で輸出もしていました。大正時代には7社ほど製造していましたが、昭和30年ごろからシャープペンシルやボールペンの普及により岸和田での鉛筆製造は終わりを上げます。

眼鏡レンズ産業

岸和田のレンズ産業はガラスレンズ、特に乱視用レンズの生産が盛んでした。下松町・八阪町周辺に集まり、小規模経営の地主が多く参入して形成されました。現在も岸和田レンズ、日本レンズ、西田三レンズなどが立地しています。

竹木簾

明治22年に坂上唯吉が創業。大正2年には50万枚の製造を記録しますが、輸出が大半でした。大正5年には35カ所で製造していますが、家庭内工業的なものでした。

屋根瓦

大正初めに6カ所の小規模な製造所があり、瓦を盛んに製造していました。しかし瓦を焼くための煙による公害などの問題から姿を消しました。

商工業の歴史③～最近の産業～

太平洋戦争後は、モノ不足から来る国内の需要と朝鮮動乱による特別の需要で、再び紡績王国の道を歩み始めます。昭和30年代は、高度経済成長期で、右肩あがり成長していった時代です。その後、産業構造の変化から、再開発のために臨海部が埋め立てられ、新しい産業が興された反面、漁業が大きな打撃を受けます。平坦部でも住宅化が進み、都市化の傾向が著しくなり、専業農家が減って兼業化が進み、市外へ通勤する人も増加します。

戦後の財閥解体とも合わせて中小企業の重要性が高まるなか、劣悪な経済状況から抜け出すため、昭和23年に岸和田商工会議所が発足しました。当初は旧岸和田公会堂の中にあり、毎年、物価調査や商工まつりを行うなどし、また、当時の岸和田産業界の生命線である繊維と貿易の振興に尽くしました。

戦前戦後の岸和田の海岸一帯は大量に獲れる鰯の煮干しに埋め尽くされていました。昭和41年、岸和田市は独自に沿岸部を埋め立てて現在の大阪鉄工金属団地を建設、さらに同年、北隣の忠岡町にまたがって大阪木材コンビナートを建設し、産業構造の転換を図りました。

昭和45年、万国博覧会を頂点に景気は一気に後退、中国などの途上国の追い上げにあって泉州の繊維工業は再び厳しい時代を迎えます。東洋紡・日紡（ユニチカ）・帝国産業（テザック）などの大企業は撤退し、工場跡地は住宅や商業施設に姿を変えました。

近年、岸和田市では産業を再び活性化させるため、埋立造成の進む阪南2区（ちきりアイランド）や開発が進むゆめみヶ丘などへの企業誘致が進められています。

ちきりアイランド
(阪南2区)



臨海部の産業用地・ちきりアイランド(阪南2区)

甲子園球場 36 個分
以上の広さ!



岸和田市の沖合に埋立地が造られ、産業用地として利用されているのはご存知ですか?

平成 11 年から事業が進められている「ちきりアイランド」では、海を埋立てて新たな土地が作られています。埋立てが完了すれば、全体で約 142ha の大きさの島になる予定です。

ちきりアイランドは、用途に応じてエリアが分けられています。企業が事業を行うための用地として、工場などのための製造業用地、物流倉庫などのための保管施設用地があります。埋立てが完了し、電気・ガス・水道・道路などのインフラの整備ができた用地から、順次企業が立地しており、たくさんの方が働いています。立地している企業の業種は様々で、機械を作る工場や化粧品などの化学製品を作る工場、金属製品を作る工場、冷凍食品を作る工場などがあります。物流倉庫へは、毎日たくさんのトラックが行き来しています。

製造業用地・保管施設用地以外では、平成 19 年から「岸和田市貝塚市クリーンセンター」が稼働し、岸和田市と貝塚市から排出されたゴミが処分されています。また、北側の海域には人口干潟が作られ、鳥や魚、貝などたくさんの生物が観測されています(一般の立ち入りは禁止)。埋立ては今後も引き続き行われ、船で運ばれる荷物を積み下ろしする埠頭や、自然と触れ合うことのできる緑地などが整備される予定です。



環境に配慮したゾーン

- 環境負荷を抑えるゾーン
- 産業と環境の調和を図るゾーン
- 水辺に親しめる環境を創るゾーン

清掃工場

環境を考えた最新鋭設備を備えた岸和田市貝塚市クリーンセンターです。



西側緑地

木々を植えて島を波風から守ります。海を眺めながら緑の中の散歩等を楽しむことができます。

製造業用地

物流や産業を活性化させ、人々の暮らしを支える用地です。



マリーナ用地

ロケーションを生かしたフィッシャーマンズワーフやヨットハーバーです。

埠頭用地

*モーダルシフトで環境に優しい物流を実現します。

保管施設用地

物流や産業を活性化させ、人々の暮らしを支える用地です。



干潟



海辺の動植物や鳥を育む生き物の保護地です。

*トラックや航空機による貨物輸送を船舶や鉄道に転換することをいい、省エネや地球温暖化防止などの効果を目指しています。

ゆめみヶ丘岸和田 (丘陵地区)



ゆめみヶ丘岸和田のまち・ひと・産業

ゆめみヶ丘岸和田の目指すまちの姿

岸和田市の丘陵部に位置する地域において、都市・農・自然が融合したまちを目指した全国的にも例のない取組みが進んでいます。

この特徴は地区全体約 159ha を都市的な利用、農的な利用、及び自然として活用していく地域に区分けし、それらがつながりを持てるようなまちにしていこうとあります。



元気・快適・生き
がいがある“まち”

活力・地域を輝かせ
る産業がある“まち”

自然環境がある
“まち”

■丘陵地区の3つのコンセプト

自然と都市、農空間が一体となった“まち”



平成27年に、地区の愛称が「ゆめみヶ丘岸和田」に決まりました。ロゴデザインには、豊かな自然（●）、活力あふれる都市（●）、水の恵み（●）をあらわしています。三つの丸が「Y（ゆめみヶ丘のゆ）」を形成し、その横には地区のシンボルである「フクロウ」が隠れています。

ゆめみヶ丘岸和田に関わる人びと

地域には、まちづくりを進め、将来にわたり地域の魅力向上を目指す「ゆめみヶ丘岸和田まちづくり協議会」があります。

まちづくり協議会では、都市・農・自然に関する人びとが、より良いまちになるよう、ルールづくりや防犯への取組み、イベント開催など、色々な取組みを実施しています。



まちづくり協議会新聞



ゆめみヶ丘岸和田の産業

都市的
利用

ゆめみヶ丘岸和田の都市的な利用を進めるエリアの一部では、製造業関連の企業を中心とした誘致活動が進められており、地元雇用の拡大など、山手の産業拠点として期待されています。また、住宅や商店エリアとの住み分けを図り、良好な操業環境への配慮が行われています。

農的な
利用

岸和田市を代表する産業の一つである農業を支える基盤整備を行い、営農規模の拡大や効率化を促進するとともに、新規就農者への支援を通じ、「愛彩ランド」を起爆剤とした更なる強い農業を目指しています。

ゆめみヶ丘岸和田のこれから

魅力あるまちを実現するためには、道路、下水道や公園といった基盤整備とともに、人びとがいきいき働き、学び、暮らせるような取組みを進めていくことが大切です。

市とまちづくり協議会では、『岸和田グリーンビレッジ構想』を策定し、7つのプロジェクトを通じて、将来にわたり活気あるまちであり続けるよう取組みを進めています。

岸和田 Green Village 構想		スローライフ 実現プロジェクト
フードバレー 形成プロジェクト	竹資源活用 プロジェクト	高齢者ががやき プロジェクト
フクロウの森 再生プロジェクト	次世代のびのび プロジェクト	神於山からの 息吹プロジェクト



地区で巣立った
フクロウ



里山再生のための
植樹活動

NEWS

次世代に伝える活動

内畑町や山手の地域ではみかん栽培の土留めとしてお茶が栽培されておりかつては製茶工場もありました。

そういった地域の文化を体験し伝承していくよう、山滝小学校の児童とともにお茶栽培を行っています。

活動の様子

昔の茶畑



みんなと一緒に栄えていくといいね。



ほくたちが
住める環境
も考えてね。



銀行

明治期に経済活動が活発になるとそれを支える銀行が次々と生まれています。明治11年に第五十一国立銀行（31年に五十一銀行と改称^{かいしょう}）、明治26年に岸和田銀行（35年に五十一銀行と合併）、明治27年には岸和田貯蓄銀行^{ちよちく}（大正11年には岸和田銀行と改称）が誕生、明治30年に和泉貯金銀行（大正11年に和泉銀行と改称）、明治40年に寺田銀行が誕生し岸和田の経済を支えました。昭和15年には岸和田銀行、和泉銀行、貝塚銀行、五十一銀行、寺田銀行の5行が合併して阪南銀行が誕生しますが、昭和20年に住友銀行と合併され岸和田に本店のある銀行は姿を消します。その後昭和26年に岸和田市に本店を持つ泉州銀行が新たに設立されています。

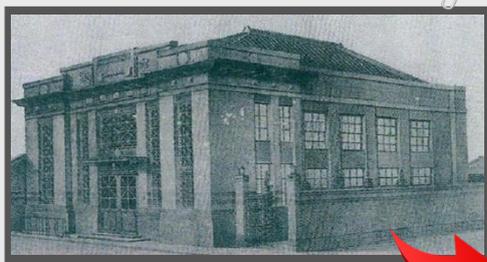
中小企業を対象にした金融機関^{きんゆう}としては、大正7年に岸和田信用組合が設立され、その他にも春木信用組合、相互貯蓄銀行、近畿無尽株式会社、日本相互貯蓄銀行、不動銀行などがありました。

写真で見よう！

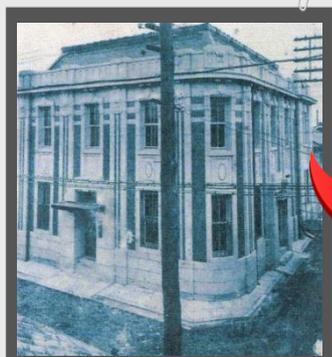
現在は
自然資料館！



第五十一銀行

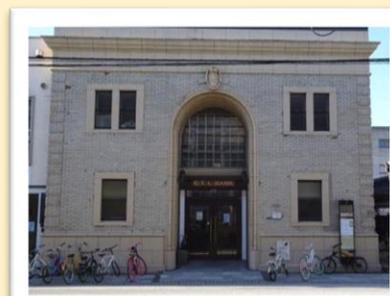


寺田銀行



四十三銀行岸和田支店

現在は成協信用組合
岸和田支店！



旧和泉銀行



旧交野無尽金融岸和田支店
(現在の近畿大阪銀行)



泉州銀行本店
(現在の池田泉州銀行)



旧岸和田貯蓄銀行
(現在の岸和田中央会館)

泉州卸商業団地

戦後、食料物資の流通を円滑に行うため総合卸売市場が昭和25年に開場し、その後岸和田魚市場と岸和田水産市場ができて総合市場として大きな働きをしましたが、昭和37年に民営化されました。この卸売市場や旧国道26号線沿いに大きな卸売商店が建てられ問屋街を形成するようになりました。

しかし、旧市街地の並松町・沼町・五軒屋町などに集中していたため交通事情も悪く店舗が古くなり、倉庫と分かれているなどの不便があったため、昭和42年に泉州卸商業団地協同組合が発足しました。

昭和48年に第二阪和（国道26号線）と府道岸和田港塔原線、JR 阪和線に囲まれた土地に泉州卸団地が完成、青果・鮮魚の卸売り並びに一般食品・繊維製品・包装資材・機械器具・建築資材等の卸売業者53企業が加入しスタートしました。現在は37企業が加入しています。



泉州卸商業団地昔と今

泉州卸商業団地協同組合は平成29年、創立50周年を迎えました。JR 東岸和田駅の高架化でより便利になることから、利用しやすい環境づくりを進めています。



NEWS

岸和田の自慢がここにある！岸和田ブランド

平成22年度より市内で生産・製造・加工された優れた商品を「岸和田ブランド」として認定し、情報発信や販売促進を推進する事業を行うことで、岸和田市の知名度向上と地域経済の活性化をめざしています。



第1回 	「だんぢり」 「だんぢりまんじゅう（館・クリーム）」 「大阪泉州桐筆等」 「泉州水なす（A品に限る）」 「包近の桃（化粧深箱に限る）」	第5回	「岸和田型バッチ（股引）」
	第2回 「玉時雨」 「純米大吟醸 三輪福 米の華」 「梅花むらさめ」	第6回 	「ピュアウォーマー」 「登録銘菓 八陣の庭」
第3回 	「Hana 塩昆布（バラ・カーネーション）」 「特上白味噌 ・米糍 赤味噌」	第7回 	「彩誉人参ドレッシング」 「しらすちりめん（太白）」 「クイーンオニオン®」
第4回 	「水なすぬか漬『泉州久米田漬®』」 「水なす漬（ぬか漬）A級品」 「地車用車輪『組駒』」	第8回 	「MARENCO（マレンコ）の キルティング製アウター」 「もも糍（桃の甘酒）」

